

羅針盤



教材は自分の足で探す

社会科部長 杉田 吉男

私事で恐縮ですが、私は大学で民俗学を専攻しました。日本民俗学は、柳田國男や折口信夫によって近代科学として完成され、日常生活文化の歴史を、民間伝承を主な資料として再構成する学問です。

民俗学の探究では、「重出立証法」がとられます。「重出立証法」は「比較研究法」ともいわれ、より多くの民間伝承を採集して、比較しながら真実を見つけ出していく探究方法です。とにかく、現地へ出向き、少しでも多くの人に話を聞くといった地道な調査を繰り返します。要は、自分の足で現存する対象物や話者を探し、自分の目と耳で事実を確認していくのです。私も大学時代には、岡崎市内をはじめ、全国各地に出かけて、現地調査をしたり、多くの古老から聞き取りをしたりしました。

正直言って民俗学で学んだことが、直接、小中学校の教育に役立つとは言い難いですが、その探究方法は今でも十分に通用するであろうし、社会科の教師としては大切な資質だと思っています。

岡崎市社会科部では毎年、基礎研修委員会が中心となって、社会科の「授業力・教師力アップセミナー基礎編」を開催しています。ここ数年間このセミナーでは、岡崎むかし館主任専門員の野本欽也先生を講師にお招きしてフィールドワークを行っています。本年度は、矢作地区のフィールドワークを行い、和志取神社や荒神神社、和志山古墳を見学しました。私は和志山古墳の存在は知っていましたが、恥ずかしながら現地を訪れたことはありませんでした。今回、前方後円墳を直接目にした瞬間、この古墳を教材化するための効果的な方法を考え出している自分がそこにいました。

講師の野本先生は、「教員が教材を足で探すことが大事。教員が実際に見たり聞いたりしないと、子供に伝わらない。」と言われます。私も全く同感です。しかし、IT化の進んだ現在、社会科の実践でも「インターネットを利用して」という言葉が頻りに登場するようになりました。それと同時に、自分で現地に出向いて調査した上で行う実践が少なくなってきたように感じます。確かにインターネットは便利で、教材研究も短時間で手軽にできます。でも、教師が一手間かけて教材を足で探す努力をしなくなったら、子供にとって真に魅力ある社会科の授業が展開できなくなるのではないかと危惧しています。ぜひ、1年に1回は、自分の足で探した教材で授業を創っていくようにしたいものです。



矢作地区のフィールドワーク

「授業力・教師力アップセミナー基礎編」報告

8月8日(月)、矢作地区においてセミナーを行いました。猛暑の中ではありますが、とても多くの先生方にご参加いただきました。

午前中に行われたフィールドワークでは、岡崎むかし館の野本欽也先生に史跡についての詳しい解説をうけながら、和志取神社、和志山古墳、荒神神社を見学しました。

午後からは、総合学習センターに場所を移し、フィールドワークについての振り返りや地域教材を発掘する方法、また、フィールドワークを通じた学習のよりよい進め方などを野本先生から教えていただきました。その後、小グループに分かれて2学期の社会科の授業に生かせる工夫等を、参加者同士で話し合いました。新学期に向けて、社会科の授業が楽しみになる、有意義な研修会となりました。

(基礎研修委員会委員長 男川小 原田 康成)



第66次 教育研究愛知県集会報告

10月22日、名古屋市のウインクあいちにて、第66次教育研究愛知県集会が開かれました。社会科部からは、社会科教育の小学校・中学校各分科会と環境問題と教育の分科会に、計5名の先生が正会員として参加されました。活発な議論がなされる中で、「子どもの姿」とらえ、その変容から成果や課題を分析した岡崎の研究実践が高い評価を受けました。その中から、2名の先生方に教育研究集会の様子について報告していただきました。

- 参加された正会員の先生
- 社会科教育 小学校
丸尾 健太先生（三島小）
前田 康幸先生（井田小）
 - 社会科教育 中学校
岡本 昌也先生（矢作北中）
中根 良輔先生（翔南中）
 - 環境問題と教育
日置 正敏先生（翔南中）
- ※全国教研に正会員として参加

社会科教育小学校分科会では、地域学習3本、国土・産業学習4本、公民学習4本、歴史学習9本の計20本のレポートをもとに、活発な質疑・討論が行われました。地域学習では、見学・聞き取りといった体験活動や調査活動を通して、どのような力を養っていくのかということが話し合われました。また、4年生の歴史的事象を取り入れた開発単元と6年生の歴史学習との違いなども話し合われました。国土・産業学習では、地域の産業の現状を通して全国の産業の実態や問題にどうつなげていくかということを中心に話し合いが進みました。

本年度の集会の特徴として、公民・歴史学習が合わせて13本ということがあります。したがって、午前中から6年生の実践報告が始まり、質疑・討論では、多くの意見が出されました。産業学習と同じように、地域と全国をどう結び付けていくか、歴史事象は現在では見えないので、見えないものを子どもたちが実感的にとらえることができるように、どのような手立てを講じる必要があるのか、歴史学習における社会参画をどう考えたらいいのかなどについて話し合われました。



総括討論では、根拠をもった意見による話し合いで身に付けるべき力、社会科学学習を通して養うべき社会認識、発達段階において子供たちが学びを通して社会参画している姿のとらえを中心に話し合いが進みました。

助言者の先生からは、「根拠とは、どういうものなのか」「社会科における社会参画とは」などについて、ご自分の実践を踏まえながら具体的に指導していただきました。今回の経験を今後の実践に生かせるよう努力していきたいと思っております。

（井田小 前田 康幸）

社会科教育中学校分科会では、地理学習4本、歴史学習7本、公民学習7本の計18本のレポートが発表され、「主権者意識の高まり」「地域学習への意欲の高まり」「地域素材の見方・考え方」「言語活動を通じた社会認識の構築」について討議が行われました。

地域素材に関する討議では、毎年その有効性が示されているため、今回は留意点やデメリットを話し合うという新しい視点から、社会科の授業について考えることができました。また、総括討論では「自己肯定感を高める社会科の授業のあり方」、「中学校の段階で主権者として求められる資質や能力」について活発な意見交換が行われました。

助言者の先生からは、討論した内容をもとにして、「地域素材は実際に足を運んで学ぶことができる点から、社会科の原点である」、「自己肯定感を高めるためには、発言に耳を傾けることが重要である」など、社会科の授業で基礎となる部分を再認識することのできるご指導をいただきました。

他地区の研究方針や地域素材の生かし方、単元構想の工夫など多くのことを学ぶことができたので、今後の授業実践に生かしていきたいと思っております。（翔南中 中根 良輔）



社会科研究作品展&発表会

特別賞を受賞したみなさん

今年度も社会科部と岡崎むかし館が協力して、10月1日（土）～11日（火）に岡崎市図書館交流プラザ（りぶら）で「社会科研究作品展」を行いました。

市全体で、過去最多の3225

点となり、そのうち小中合わせて131点の代表作品が作品展に出品されました。足でかせいだ情報や資料を多く集めた作品、身近な所から興味をもって課題を設定して追究を深めた作品が多く見られました。集まった作品は、研究作品委員会の先生方とりぶらの職員の方々の手によって、2階に展示されました。作品が展示された児童生徒のみなさんには、市教育委員会より賞状が贈られました。展示期間中は、熱心に作品に見入る大勢の親子連れや市民の皆さんの姿があり、今年も大変好評を博しました。

期間中の10月8日（土）には、「研究作品発表会」を行いました。特別賞に選出された5名が、りぶらにて研究の成果を発表しました。研究テーマを決めた理由や現地調査を行った時の苦労などから、児童生徒が意欲的に社会科の研究に取り組んでいる様子がよく伝わってきました。

学年	テーマ	氏名	学校名
小4	羽根小学区～公園めぐり～	中神 啓之	羽根小
小5	なぜ六ツ美は岡崎市なのか？	横山 和翼	六ツ美南部小
小5	災害に備えて色々調べ、体験してみた	富永 葉菜	六ツ美西部小
小6	源義経はどの道を通ったのか	川本 夏輝	三島小
中3	細川に残る信仰の道 真福寺道	木村 勇陽	新香山中

ちよつと寄り道

「誓願寺の大地蔵」(梅園小学区)

梅園小学区にある誓願寺は、1566年(永禄9)、徳川家康が官位勅許の仲立ちをした泰翁のために建てた寺と言われています。境内には幼少の家康が腰を下ろして休んだとされる石があることで知られています。そんな誓願寺の墓地には、ひときわ大きな石が置かれています。まるで何かの台のようです。実は誓願寺には、次のような昔話が残されています。

「昔、石工の夫婦の子が病気になった。夫婦が心配していたところ夢に仏様が現れ、お地蔵様を作るよう告げられた。夫婦はお告げどおり、小さな石でお地蔵様を作った。一心にお参りしたところ、子どもの病気は治った。しかし、ある朝、お地蔵様がなくなっていた。すると命を助けられた夫婦の子どもが、前よりも大きなお地蔵様を作ろうと言った。そして箱柳の奥から大きな石を運び、半年かけて高さ約4.8mのお地蔵様を作った。」

不思議な石の正体は、なんとお地蔵様の台座だったのです。しかも大きなお地蔵様です。今はなき大地蔵ですが、奈良で言うところの大仏と同じように、梅園で暮らす人々を見守っていたかと思うと、その存在が誇らしく思えます。



(梅園小 新井 健祐)

平成28年度 三教研報告

8月5日、蒲郡市民会館において三河教育研究会社会部会夏季研修会が開催されました。この中で、岡崎を代表して2名の先生が実践報告をされました。その様子を報告していただきました。

～小学校6年生分科会～

小学校6年生の歴史単元「15年戦争と岡崎市民の思い」の実践について、報告しました。岡崎空襲によって焼失した三島尋常高等小学校と、学区にある安心院の戦争遺跡を教材化しました。追究活動を通して岡崎市民の思いに迫り、戦争がいかに悲惨なものであるかを理解させました。そして、未来に平和が続くためには、今の社会状況に目を向け、自分たちにできることは何かを考え、行動に移そうとする姿を求めることの2点を目標としました。

本単元では、子どもたちは、岡崎空襲における三島学区の被害状況を知ったうえで戦争遺跡見学をすることで、「どうして戦争が起きたのか」と疑問をもちました。そこで、日本、岡崎市、三島学区を関係付けて考えられる年表や当時の状況が分かる自作資料を提示して、子どもたちに追究活動に取り組みせました。また、市民の思いに深く迫れるように、「戦争体験者の話を聞く会」や「すいとんを作って食べる時間」を設定しました。子どもたちは、これらの学習を通して、戦争とは、「人々の生活や心を苦しめるもの」「人の命を奪い、お互いに与える損害が大きいもの」といった考えをもちました。単元のまとめでは、これからの社会が平和であり続けるために、「戦争について多くの人に伝えたい」「教育をしっかりしたい」などの意見が出されました。本単元を通して、戦争の悲惨さを理解し、平和な社会の実現に向けて、自分たちができることを積み重ねる大切さを学びました。

協議会では、助言者の先生から、子どもたちに提示する資料を精選していくことや、単元のまとめでは地域教材にとどまらず、日本全体に広げていく必要があることなどをご助言いただきました。今回の課題を生かし、今後も教材研究を続けていきたいと思えます。(三島小 丸尾 健太)

～中学校公民分科会～

中学校3年生の公民単元「これからの人権保障」の実践について、報告しました。生徒は、不治の病に侵されながら安楽死を選択したアメリカ人女性の話から、新しい人権、自己決定権に関心をもちました。「生きる権利同様、死ぬ権利も保障されるのか」という課題を設定し、街角アンケートをして、安楽死について世間がどう思っているのか調べ、その結果を基に話し合いをしました。

学習を通して、命の価値をはかることや自分らしく生きる権利の範囲を定めることは、とても難しいとわかりました。しかし、中学生が安楽死について様々な意見を聞き、自分の身に置き換えて権利はどうあるべきかを考えたことで、人権の在り方について考えを深めることができました。

協議会では、助言者の先生から、「社会に参画していく子どもを育てるためには、社会事象を自分の身に置き換えて考え、人権保障をどこまで実感するかが大切であり、お互いの考えを確認したり、考えを再考したりする過程も大切にしていくことが望まれる。」とご助言をいただきました。社会参画していく子どもの育成の仕方について学ぶことができました。(矢作北中 岡本 昌也)

研究発表会報告

三島小学校（10月 5日）

「思考力・判断力を伸ばす社会科・生活科の授業」を研究主題にして、研究発表会を行いました。地域を素材とした魅力ある教材を開発しました。話し合いの中で子どもたちの考えを焦点化したり、思考を深めたりするために、思考・判断の「すべ」を投入し、第二の学習問題を本時の中に組み込み、子どもたちの認識が関係認識まで高まることを目指して研究に取り組みました。4年2組「くらしを守る一町を見守る三島消防団一」では、仕事と両立させながら三島学区の安全を見守る消防団の必要性を子供たちが理解できることをねらいとしました。「大人になったら消防団に入りたかどうか」という学習課題を設定し、話し合いを行いました。考えを出し合った後に、「全国の消防団員数の変化」のグラフを提示すると、消防団員数が減っていることに対し、驚きの声が上がりました。そこで、「もし消防団がなくなったら、どうなるかな」と発問したところ、「大人になったときに消防団に入るかどうかではない。災害時の救助活動の補助や防災の呼びかけ、夏祭りの手伝いなど、消防団はわたしたちが安全に生活していくためには、なくてはならない存在である。安全なまちづくりには、消防署といった公的な機関だけでなく、地域住民の力も欠かせない」といった発言があり、消防団についての理解を深めることができました。



（三島小 丸尾 健太）

藤川小学校（10月19日）

本校では、「仲間と関わり合いながら、主体的に学びを深める子供の育成一学習・学級の規律作りと子供を生かす日々の授業実践を通して」というテーマに授業研究協議会を行いました。

6年生「江戸幕府と政治の安定」の学習では、学区の方との藤川宿のフィールドワークをすところから始めました。江戸時代の東海道の宿場としての役割を学習した後に、300年の年月を経た本物の高札に出会いました。高札とは、幕府が人々に法令などを周知させるために、城下町や宿場に掲げさせた立札です。藤川には本物の高札が6枚残っており、その複製が本陣跡地に掲げられています。



高札の内容を読み取る中、子供たちは、平和な世の中を目指した江戸幕府の思いや、幕府の支配に批判的な気持ちを持ちながらも法を守るうとした庶民の思いに気付くことができました。また、本物の高札を目の当たりにして、藤川に残る宝のすばらしさに改めて気づくことができました。（藤川小 中村 洋子）

葵中学校（11月 9日）

本校では、「協働的に学ぶ授業の創造－ICTの有効活用を通して－」を研究主題として、研究発表会を行いました。1年生歴史的分野「武士の台頭と鎌倉幕府」の単元では、「なぜ鎌倉幕府は滅亡したのかを考えて説明しよう」という授業を行いました。「分割相続」「元寇」「永仁の徳政令」「朝廷」という四つのキーワードに関する資料を読み取り、それぞれの事象がどのように幕府の滅亡に関わったのかを考えました。個人追究をした後、グループ活動を行いました。グループ活動では、タブレット端末上で四つのキーワードを流れ図に表し、幕府滅亡のストーリーを考えました。個人では考えがまとまらなかった生徒も、積極的に話し合いに参加する姿が見られました。また、グループでの話し合いの結果を、大型ディスプレイに投影しながら発表をすることで、他のグループの考えを視覚的に捉え、比較することで、生徒が自身の考えを深めることができました。その結果、四つの事象が繋がって鎌倉幕府が滅亡したということを理解することができました。



（葵中 小久江 友見）

竜海中学校（11月16日）

本校では、「チャレンジ 竜海式 Active Learning ーコミュニケーションを取り入れた教科学習を中心にー」をテーマに2年次の研究発表を行いました。昨年度の課題である「教師誘導型授業からの脱却」、「コミュニケーションの促進」を意識して授業づくりに取り組んできました。

3年生公民「いつか私も裁判員！！裁判員制度について考えよう」の授業では、裁判員制度のよさと問題点について話し合いました。裁判官や弁護士、検察官、裁判員経験者など裁判にかかわる人たちへのインタビューを基に、さまざまな立場からよさや問題点を話し合う生徒の姿が見られました。また、岡崎地方裁判所での傍聴や模擬裁判の経験を通して、自分が体感したことを根拠に意見を述べる生徒の姿もあり、生徒が主体となって話し合いが進みました。さらに、授業の後半では、「裁判員制度を続けるべきか、どうか」の課題に対して、「続ける」、「続けない」、「改善していく必要がある」という立場に分かれて話し合いを行いました。特に、裁判員の責任や負担の面では、自分が裁判員になったらという立場で切実感をもって考えることができました。付け足しや仲間の意見を受けて発言する生徒が多く、生徒主体の授業となりました。



（竜海中 内藤 恵三）